

学徒出陣と勤労働員

平成22年11月6日 高根台公民館

「学徒出陣」と聞いて、戦争を経験された方ならず頭に浮かぶのは、明治神宮外苑陸上競技場で行なわれた文部省主催の「出陣学徒壮行会」、あの雨の中の行進ではないでしょうか。昭和十八年十月二十一日、朝から冷たい雨の降りしきる寒い日でした。東京近辺七十七校の学生三万五千人が、制服制帽にゲートル姿、銃剣をつけた三八式歩兵銃を肩に担いで、それぞれの校旗を先頭に水しぶきをあげながら行進したのです。歩調を高くとった雨中の行進が、一層の悲壮感を掻き立てました。

太平洋戦争では大勢の若者が犠牲になりましたが、その悲惨さを最も端的に象徴するシーンとして、テレビの戦争番組というところこの場面が取り上げられましたし、また皆さんの中にもご自身、あるいはご家族が学徒出陣されて、特別な感慨をお持ちの方がいらつしやると思います。学生はそれまで、「学業に励む」という理由で徴兵が猶予されてきました。それが戦局の悪化でその特典が停止され、満二十歳の徴兵年齢に達した学生は、理工系と医学部、師範学校の学生を除いて、卒業を待たずにみんな戦場へ駆り出されることになったのです。

競技場のスタンドは、見送りの家族や後輩、中学生、女学生など六万五千人で埋め尽くされました。東条英機首相が、すっかり有名になったキンキン声を張り上げて、藤田東湖の詩「天地正大の気、粹然として神州に鍾る」。この句を引用し、国難に身を挺して赴く若者たちを賛美、激励すれば、東京帝国大学の江橋慎四郎が出陣学徒を代表して、答辞を述べました。「生等今や見敵必殺の銃剣を提げ積年忍苦の精神研鑽を挙げて悉く此の光榮ある任務に捧げ、挺身以て頑敵を撃滅せん。生等もとより生還を期せず」。

会場には「海ゆかば」、「紅の血は燃ゆる」の大合唱が起こり、帽子やハンカチを振る者、歓声に拍手がこだまし、神宮の杜は興奮の渦に包まれていったのです。駒沢女学校の生徒だった直木賞作家の杉本苑子さんは、「ワアワア泣きながら隊列を乱して、その出て行く人たちのあとを追っていった。『行つてらつしやい、行つてらつしやい』って……」。こう話していますが、びしょぬれの日の丸の小旗が破けて棒だけになったのを、夢中で振り回していたそうです。

私がこの場面を見るたびに、いつも胸が締め付けられるように思うのは、果たしてこの中で何人の人が無事に帰って来られたのだろうか、ということですが、出陣学徒は、この年だけで全国で推定十三万人余り。十月二十五日から本籍地で徴

兵検査を受け、陸軍は十二月一日、海軍の場合は九日と十日に、それぞれの思いを胸に秘めて入隊していききました。そして徴兵年齢は十二月には、十九年度から十九歳に引き下げられることが決まったのです。

政府が法文系学生の「徴兵猶予停止」を閣議決定したのは、ちょうど一カ月前の九月二十一日でした。東条首相はこれを受けて翌日夜のラジオ放送で、「官民に告ぐ」と題して、一億総決起に熱弁を振るつたのですが、日大文学部の講師をしていた作家の高見順は、その驚きを日記にこう書いています。「夕方帰宅、電車の中で日大の学生に挨拶される。『かえってさっぱりしました』という。何のことかわからなかったが、よく聞いてみると、文科系統の大学が閉鎖されたのだという。驚く。朝刊に発表してあったという。いよいよ凄くなってきた」。

戦局の厳しさを肌で感じていた学生たちが、「いずれは来るもの」と覚悟していたとはいえ、突然の徴兵猶予停止の発表は、やはりショックだったようです。戦没学生の遺稿集「きけ わだつみの声」などから拾ってみると、二十一歳で本州東方海上で戦死した東京商科大学の板尾興市は、「何とか諦めはつきません」と書いてはいますが、「それにしてもあまりに短い月日しか残されていないので、何ら今までの学問への努力をまとめた形で残すこともできそうになく、読みさした本にしておりはさんで出かけねばなりません。ふたたび帰って書物の前にすわるのはいつの日かと考えますと、まことに寂しいしだいです」。また「非常に動揺し、仲間と夜おそくまで興奮して話し合った」と書いたのは、朝鮮京城で二十四歳で戦病死した東京帝大文学部の坂巻豊です。直面する死を恐れてはいないとしながらも、「ただ如何にして此の至美なる生を諦観し得るかに最後の苦悩を感じるのがあります」と、死の戦場へ赴く悩みを滲ませています。

昭和二十年五月にビルマで戦死した東京帝大経済学部の松岡欣平は、入隊までの何日かを郷里富山で過ごしました。封切りされたばかりの大映映画「無法松の一生」を見て、阪妻、阪東妻三郎の熱演に感動し、運動会、提灯行列、太鼓などが走馬灯のようによぎっていったのでしよう。「すべてが過去の淡い夢と消えてしまった。いつの日にか運動会の喜びにひたれよう。俺は気が狂いそうだ。俺は太鼓を打つてみたい。俺は提灯行列をやってみたいのだ。長袖の着物がみたいのだ」。そして「戦争、戦争、戦争、それは現在の自分にとって、あまりにもつよい宿命的な存在なのである。世はまさに闇だ。戦争に何の倫理があるのだ。大義のための戦、大義なんて何だ。痴者、愚か者の寝言に過ぎない」。無理遣り戦場に行かなければならない心境を、日記に悲鳴のように訴えています。

学徒出陣が「戦争の悲惨な一齣」として語り継がれるのは、この運命の決定が彼らの意志とは全く関わりのない所で行なわれたからです。「教育を犠牲にしてもあくまで戦争を継続しよう」という、国家の至上命令でした。この大きな力の前に、出陣学徒は青春特有の気負いと自意識の中で、それぞれ精一杯に意義付けを

見つけようとしています。それだけに余計に切ない気持ちにもなるのですが、教師たちはどんな思いで出陣学徒を送ったのでしょうか。東京帝大文学部長の今井登志喜は、十一月の最終講義で涙と共に訴えました。「前途ある諸君を、今痛恨の思いをもって戦場に送る。今回の政府の措置はまさに千載の痛恨事とせねばならぬ。願わくば諸君、命を大切に。生きて再びこの教室に会せんことを」。フランス文学の教授辰野豊もまた「諸君、生きて帰れ。戦争の帰結は問うまい。ただ生きて帰れ」と語りかけたそうです。あの戦時下、これだけのことを言うのは、学生への愛情と勇気なくしては出来ないことでした。

十月二日に発表された学徒出陣の細目では、海軍志望者は徴兵検査の際に申し出ることに、そして陸軍は三カ月後に幹部候補生に、海軍も入隊後、試験により予備学生に採用するとなっていました。いずれにしろ、すぐ将校にするというのですから、初級将校の不足を出陣学徒によって補おうというものなのです。開戦時陸軍二百二十七万、海軍三十一万、二百五十八万人だった総兵力は、十八年九月には陸軍三百六十万、海軍七十万と、四百三十万人にも増えていました。増える兵隊に対して、指揮官が不足になっていたのです。いくら兵隊がいても、指揮官がいけないことには烏合の衆に過ぎません。

ことに、海軍のパイロットの不足は深刻でした。原因は、南太平洋ソロモン海域での航空機消耗戦です。米軍がガダルカナルに上陸して来たのが昭和十七年八月七日。ここから南太平洋の攻防戦が始まったわけですが、「ラバウル小唄」で「さらばラバウルよ」と歌われたラバウル海軍航空隊が、ニューブリテン島のラバウルを引き揚げたのが十九年二月でした。この一年半の間に実に七千九十六機、七千八百八十六人もの搭乗員を失ったのです。それもハワイ・マレー沖海戦以来、歴戦のAクラスのパイロットが数多く犠牲になりました。真珠湾攻撃では雷撃で九〇%、急降下爆撃四〇%、水平爆撃でも二七%という輝かしい戦果を挙げた、名人芸に近い技量の持ち主ばかりなのです。

この頃には日本海軍の誇るゼロ戦、零式艦上戦闘機の威力も通用しなくなっていました。米軍は昭和十七年七月九日、アリューシャン列島の沼地に引つ繰り返っていたゼロ戦を見つけると、機体を飛行出来るように復元してその弱点発見に努めたのです。最高時速五百三十三キ、小回りがきき、優れた戦闘性能に改めて驚嘆したと言われますが、時速四百八十キを超えると運動性能が落ちること、また操縦席や燃料タンクに防弾装置がありません。ゼロ戦の弱点を掴んだ米軍は、前線部隊に「ゼロ戦と戦う時は時速四百八十キ以上を保て」。こういう指令を出し、製造中だったグラマンの戦闘機F6Fヘルキヤットにも、この技術情報を取り入れました。急上昇、急降下が出来、つまりゼロ戦を上回る戦闘性能を持ち、分厚い防弾装置をつけたヘルキヤットは、十八年八月には早くも実戦に登場してきたのです。空中戦でのゼロ戦の優位は、みるみる失われていきました。

攻撃重視で、防禦には極めて関心の薄かった日本海軍用兵思想の欠点が表面化したわけですが、ゼロ戦の設計主任を務めた堀越二郎技師はこう話しています。

「設計要求書には速度、空戦能力、上昇力について、どれも同じように書いてあった。研究会で『どれが比較的重くて、どれが比較的軽いのか』と質問したところ、パイロットからは『みんな必要だ』と激論になった。しかし防弾装置については、もともと要求がなかった。国家の至上命令を体してやった我々は、要求のないことまでやる余裕はなく、結局これがゼロ戦の弱点になった」。

軍部は、口さえ開けば「国家総力戦」を唱えていました。ところが、その総力戦を戦う物的戦力に限界があったのに、それを精神力という強がりでごまかして、戦争に突入してしまいました。そして緒戦の勝利に浮かれていたのでしょうか。人的戦力の面でも後れをとり、初級将校やパイロットに量的な不足を招く事態になってしまったのです。いくら飛行機を造つても、乗る人がいなければどうにもなりません。そこでパイロットの大量養成に目をつけたのが、学徒だったのです。

この学徒出陣と間もなく行なわれた勤労動員によつて、日本中の学校はほとんど空っぽになりました。ところがアメリカの大学はそれよりはるかに早く、開戦と同時に空っぽになっていたといえます。真珠湾を攻撃されて、「リメンバー・パールハーバー」の合言葉にも燃えたのでしようが、アメリカは学生の方から競つて軍隊を志願したのです。この上からの強制と、自発的志願との違い。日本の場合は、軍事教練で早くから軍国主義教育を受けていましたが、同時にビンタやしごきなど、軍隊生活の暗い面も知っていました。それが学生たちに「何も志願してまで」と、二の足を踏ませたようです。そのことは、十八年二月に締め切られた官立高等学校の入学願書にも表われています。理工系の志願者が募集四千八百三十六人に対して、四万二千五百三十九人と八・八倍にも激増したのです。心のどこかに、理工系なら徴兵を免れることが出来るのじゃないか、そんな期待感もあつたように思います。

大体が日米戦争がどんな戦いになるのか、その認識と展望に欠けていました。開戦劈頭、機動部隊で真珠湾を攻撃して、せっかく「航空機の時代」という新しい時代の扉を開いておきながら、日本の陸海軍首脳部が「この戦争は空で決まる」――このことを完全に自覚したのは昭和十八年、それもかなり遅くなってからだったのです。それは航空機生産に必要なアルミニウムの配分に、よく表われています。アルミは一機製造するのに陸軍機で三・八一ト、海軍機で四・五七ト必要でした。ところが十七年度に航空機に充てたアルミは全生産量の四一％しかなく、十八年度でも五六％、十九年度になってようやく百％と、全生産量を航空機に充てることにしたのです。ですから十九年度の航空機生産は、十七年度に比べて陸軍機二・五倍、海軍機三・二倍と、やっと量産態勢へ転換出来ましたが、先程も話しましたように乗る人がいなくてはどうにもなりません。となると、予算の制約

もあつてですが、海軍の「少数精鋭主義」の考えが災いしました。

学徒出陣で知られるようになった海軍の飛行科予備学生制度は、昭和八年からあることはありました。海軍が日本学生航空連盟に集まってくる飛行機ファンの大学生に、霞ヶ浦航空隊見学とか、体験搭乗、操縦学習など、こういった便宜をはかつてやる代わりに、卒業後の兵役は海軍で務めてもらう。「空の予備士官」として二、三年働いたら、本来の就職先である官庁や銀行、商社に戻り、いざ鎌倉の時にはすぐ駆け付けてもらうという仕組みです。しかし、自動車だってまだ少なかった当時の日本で、そんなに飛行機マニアの青年がいるわけありません。毎年せいぜい五人か十人程度、微々たるものでした。

この飛行科予備学生が九期目を数えた昭和十六年初めのことですが、初級士官の不足が問題になってきたのです。巨大戦艦「大和」が年末には完成しますし、やがて「武蔵」も出来ます。万一の日米開戦にも、備えなければなりません。軍令部は江田島の兵学校を拡充して毎年千人くらい採用する考えでしたが、海軍省は反対です。そんなに採れば使い捨ての人間が出るし、弊害も出てくる。一期五、六百人が限度で、人事局がそのギャップを埋めるために考え付いたのが、予備学生を飛行科だけではなく、陸戦、通信など一般兵科にも広げることだったのです。

問題は、年間五百人も大学生が、果たして海軍を志願してくれるかどうかです。そこでお手本にすることにしたのが、昭和十三年から採用している「二年現役主計科士官」という制度です。支那事変では大学出の有為な青年が召集され、一兵卒として大陸で戦死しています。これだけの教育をするには何年もかかるのに、余りにも惜しいし、国家としても大きな損失じゃないか。そう考えた人事局が、法学部、経済学部卒業予定の学生に限り、試験の上、主計中尉として採用する。二年間の勤務を終えたら予備役とし、有事の際には召集して主計科士官の不足を補おうというわけです。大臣の米内光政、次官の山本五十六に諮ると、「それはいい」と快諾を得て、十三年五月に第一期生を採用、敗戦まで十二期を数えました。元首相の中曾根康弘さんも、内務省入省後にこの主計科士官になった一人です。何しろ海軍経理学校に入ったその日から、いきなり海軍中尉なんですから、指導に当たった下士官から「中曾根学生、背筋をもつと伸ばして頂きます」と、敬語つきで教育されたんだそうです。

これに準じて兵科予備士官を募集することにしたところ、陸軍から強硬な横槍が入ったのです。戦争になった時の初級将校の補充では、陸軍は早くから手を打っていました。幹部候補生制度です。日露戦争の時、旅順攻略などで突撃の先頭に立った小隊長クラスの将校が相次いで倒れ、その補充に苦しんだ苦い経験がありました。大正軍縮でも大勢の将校を整理しています。そこで昭和二年の兵役法で、現役兵として一年間訓練を受けた者が中学以上の学歴があれば、試験によって予備役少尉にする制度を採用したのです。八年からは将校要員としての甲種、

下士官要員としての乙種幹部候補生に分かれましたが、普段の甲種採用は年間でも四千人程度です。ところが支那事変が始まってからの将校の不足は、陸軍の方が深刻でした。士官学校はこの頃には毎年二千四百人採用していましたが、とても足りません。甲種幹部候補生出身の将校は昭和十三年に五千六百人、十四年には一万一千人と急増したのです。

幹部候補生をもっと増やそうとしているところへ、この海軍の予備学生制度です。陸軍は「自分の所は入隊後、兵隊の下積みの苦勞をさせた上で、やっと見習士官にしている。それが最初から中尉なんかになれば、学生はみんな海軍に行ってしまう」と反対したのです。結局予備学生の身分は、採用時は下士官である兵曹長の上、少尉候補生の下ということになりましたが、作家の阿川弘之さんも、このちよつと損をして兵科第二期予備学生になった一人です。東京帝大文学部の学生だった阿川さんは、十七年春の徴兵検査で甲種合格していましたが、九月末には繰り上げ卒業になります。文学部では主計科士官になれませんが、陸軍に行かなければならないのかと憂鬱な気分でしたところ、文学部の掲示板に「兵科予備学生募集」の告知を見て、「やったあ」という気分だったと言います。口頭試問で「なぜ海軍を志願したのか」と聞かれて、待っていましたとばかりに「はいッ、陸軍が嫌いだからであります」。こう答えたところ、試験官の中佐がニヤツとしたそうです。もつとも阿川さんは、いきなり中尉の中曾根さんとは違って、「氣を付けられます」といった、丁重な教育はしてもらえなかったと言っています。

戦争が始まった後も、せいぜい百人どまりだった飛行科予備学生が、一気に四千七百人と急増したのは、学徒出陣の一カ月前、昭和十八年九月の入隊組からでした。遺稿集「雲流るる果てに」を遺した第十三期飛行予備学生ですが、ソロモンでの航空機消耗戦のショックのほどが分かります。そして海軍が「士官要員には水兵の生活をさせない」、この海軍教育の建前を変えたのが、学徒出陣組からでした。海軍に入った一万八千人の中から、選抜試験で五千五百人がパイロット要員に合格しましたが、そのうち三千三百人が大学在学組で、遺稿集「あゝ同期の桜」の第十四期生です。大学予科や高専在学中の二千二百人は、新たに制定された飛行専修予備生徒になりましたが、徴兵だった彼らは、最初から詰襟の軍装だった十三期までとは雲泥の差。最下級の二等水兵として一カ月半、セーラー服で過ごしたのです。ベッドではなくハンモックを吊って寝ましたし、お風呂も一列横隊で浴槽に入り、「上がれ」の命令で一斉に出ます。それでもやがて予備士官に進むとあって、海兵団につきものの下士官の教員による鉄拳制裁は少なかったそうです。

しかし、彼ら多くの出陣学徒の前に待っていたのは、特攻要員として否応なしに死の戦場に赴く運命だったのです。米軍の圧倒的な航空兵力に押され放された海軍に、決死ではなく「必死必殺」の戦法として特攻思想が芽生えたのは、ち

ようど学徒出陣が行なわれた頃です。呉軍港に近い特殊潜航艇基地で訓練に当たっていた黒木博司中尉と仁科関夫少尉は、最初は特殊潜航艇を爆装して敵艦に体当たりさせることを考えていました。しかし潜水艦に一隻しか搭載出来ず、速力も出ません。それよりは九三式魚雷を魚雷としてではなく、エンジンとして使うことを思いついたのです。人間一人が乗って操縦出来るように改造し、敵艦に体当たりさせる人間魚雷です。三十ノットの高速で、潜水艦に四隻から六隻積みますが、黒木中尉は昭和十八年暮れに上京して、海軍省、軍令部に血書嘆願したのですが、海軍省はこの人間魚雷に「形勢一気に逆転」の願いをこめて「回天」と命名し、翌年の十九年二月二十六日、呉海軍工廠魚雷実験部に試作を命じたのです。これが海軍の特攻作戦の組織的な採用の始まりでした。

回天特別攻撃隊菊水隊五隻の最初の出撃は、昭和十九年十一月二十日です。発案者である黒木中尉は九月に訓練中、「回天」が浮上せず殉職していましたが、仁科少尉はその遺影を抱いて西カロリン諸島ウルシー湾のアメリカ艦隊攻撃に向かい、タンカー一隻を撃沈して戦死しました。この「回天」はもともとが魚雷なんですから、訓練中に多くの犠牲者を出したようです。東京帝大法学部から学徒出陣した和田稔少尉も、訓練中に二十三歳で殉職した一人ですが、妹さんにこう書き残しています。「若菜、私は今、私の青春の真昼前を私の国に捧げる。私が望んだ花は、ついに地上に開くことがなかった。とはいえ、私は、私の根底からの叫喚によって、きつと一つのより透明な、より美しい大華を大空に咲きこぼれさせることが出来るだろう。私の棺の前に唱えられるものは、私の青春の挽歌ではなく、私の青春への頌歌であってほしい」。

しかし、戦局は厳しさを増す一方でした。海軍省は、体当たり作戦を潜水部隊だけではなく、航空部隊にも広げることにして、昭和十九年九月十三日、「特攻部」を新設したのです。米軍がフィリピンのレイテ島に上陸して来たのが十月十七日、四日後の二十一日から神風特別攻撃隊が出撃し、これが航空特攻攻撃の始まりとなりました。大量採用の第十四期飛行予備学生が、特攻作戦に参加するのは二十年三月の沖繩戦からです。彼らはまず「ハトポップ」と言われる地上練習機で訓練した後、十九年六月から「赤トンボ」と呼んでいた練習機を使つての飛行訓練に入りました。ところが燃料がないため、ちよつとやったかと思うと、すぐ何日もストップです。体がなまらないように、バレーボールなど運動で明け暮れる日が多かったそうですが、飛行時間わずか百時間前後という未熟な訓練を受けただけで、辛うじて間に合った特攻隊員として、九州南端の鹿屋基地などから続々と沖繩へ飛び立っていったのです。

この沖繩特攻で、昭和二十年四月十二日に二十三歳で戦死した林市造は、母子家庭の出身でした。母親は女手一つで長男の林を京都帝大経済学部に入れ、四人の子供を育てたのですが、林は特攻出撃が決まった三月三十一日、母親に手紙を

書いています。「晴れて特攻隊員と選ばれて出撃するのは嬉しいですが、お母さんのことを思うと泣けて来ます。母チャンが私をたのみと必死で育ててくれたことを思うと、何も喜ばせることが出来ずに、安心させることもできず死んでゆくのがつらいのです。私は至らぬものですが、私を母チャンに諦めてくれ、ということ、立派に死んだと喜んで下さいということ、とてもできません」。涙なしには読めない手紙ですが、「はつきり言うが、俺は好きで死ぬんじゃない。何の心に残る所なく死ぬんじゃない。国の前途が心配でたまらない。いやそれよりも父上、母上、そして君たちの前途が心配だ。心配で心配でたまらない」。こう書いたのは、四月二十八日に沖縄特攻で戦死した中央大学出身の大塚晟夫、二十三歳でした。

よく「海軍は兵学校出を温存し、予備学生を前線に立たせた」——こんなことが言われますが、これはどうも違うようです。お手元の資料の「戦死率一覽」を見てもお分かりのように、飛行科予備学生の場合、採用人数の少なかった十期が六三%、十一期は増えて八一%、十二期が四九%です。十九年卒の大量採用組の十三期が三四%で、学徒出陣組の十四期は三千三百二十三人のうち四百十一人と一二%が戦死しています。兵科予備学生も一期が二二%、阿川弘之さんの二期が一九%、そして大量採用の三期は二〇%と、五人に一人が戦死したことになります。ところが海兵の方は、六十九期六五%、七十期六六%、七十一期五七%といずれも高く、昭和十九年卒の七十三期でも三二%と、戦死率はむしろ海兵出の方が高いのです。ぎりぎりの戦局は、海兵、予備学生と、その出身を問わず、青年たちを死戦に立たせずにはおかなかったのです。

実は「出陣学徒壮行会」が行なわれた五日前、昭和十八年十月十六日に早稲田の戸塚球場で、「涙の早慶戦」と言われた「出陣学徒壮行試合」が行なわれています。東京六大学野球で一番の人気のある早慶戦は、明治三十六年十一月、早稲田から送られた一通の挑戦状から始まったんだそうですが、四十年後のこの壮行試合を提案したのは慶応義塾塾長の小泉信三でした。小泉は「学生生活に何かピリオドを打たせてやりたい。またそうしてやるのが、一番の餞になるんじゃないか。それには伝統の早慶戦が一番いい」と考えたのです。しかし慶応野球部の申し入れに、早稲田の大学当局は消極的でした。六大学野球リーグ戦は「敵性スポーツ」として、その年の四月、文部省通達で中止になっていましたし、「この時期に」と軍部に対する気兼ねもありました。それでも早大野球部が奔走して、練習試合の形でやろうということになり、非公開、選手の家族だけの招待でしたが、正午からの試合には大勢の両校学生が詰めかけたのです。

今の華やかな早慶戦とは違って、選手も応援席もみんな坊主頭、応援合戦もありません。選手の顔触れを見ると、慶応が阪神、毎日でホームラン・バッターとして活躍し「野球殿堂」入りをした別当薫、松竹、中日の投手をした大島信雄、早

稲田がやはり南海のホームラン・バッター笠原和夫と、戦後の懐かしい名選手が名前を並べています。試合は十対一と早稲田の一方的な勝利で終わりましたが、グラウンドもスタンドも全員が一つに結ばれていたのです。試合が終わると、早稲田が慶応の応援歌、慶応が早稲田の校歌を歌ってお互いの健闘を讃え合いました。いつしか「海ゆかば」の大合唱が、球場全体を飲み込むように広がっていました。みんな泣いていたと言います。そして歌い終わった学生たちは、握り締めた学帽を打ち振りながら、「戦場でまた会おうぜ」と叫び合っていたそうです。

小泉は前年、かけがえのない一人息子信吉を海軍主計中尉として失っていました。この早慶戦には、小泉の「信吉には親として親らしいことをしてやれなかつた。せめて出陣学徒には……」。この思いが強く籠められていたのです。小さい時から海軍が大好きだった信吉は、十六年春に慶応経済学部を卒業すると、三菱銀行に四ヵ月勤めただけで二年現役主計科士官になりました。間もなく日米開戦となり、巡洋艦「那智」の乗組員として出征したのですが、小泉は「君の出征に臨んで言って置く」と、信吉にこう書いています。「吾々両親は、完全に君に満足し、君をわが子とすることを何よりの誇りとしている。僕は若し生れ替わつて妻を択べといわれたら、幾度でも君のお母さまを択ぶ。同様に、若しわが子を択ぶということが出来るものなら、吾々は必ず君を択ぶ。人の子として両親にこう言わせるより以上の孝行はない」。そして「二十四年という年月は長くはないが、君の今日までの生活は、如何なる人にも恥ずかしくない。悔ゆることなき立派な生活である。お祖父様の孫らしく、又吾々夫婦の息子らしく、戦うことを期待する」。こう結ばれていましたが、何度読み返しても素晴らしい手紙だと思えます。

信吉が商船を改造した特設砲艦「八海山丸」の主計長として戦死したのは、昭和十七年十月二十二日でした。ギルバート諸島の海域を哨戒中、アメリカの駆逐艦二隻として交戦して撃沈されたのですが、予備学生として台湾の高雄で教育を受けていた阿川弘之さんは、突然隊内のスピーカーから「慶応の卒業生に告げる」という声が流れてきて、びっくりしたそうです。「小泉塾長のご令息小泉主計中尉が戦死された。慶応出身の学生は夕食後直ちに食堂に集まれ」。阿川さんは「出身校の総長の息子が亡くなつても、たとえ総長自身が亡くなつても、こういう反応を示す者は慶応以外にはなさそうに思われた。慶応の連中が軍隊に入つてからも団結心が強いこと、小泉塾長に信頼と敬愛の気持ちを持つていることを知つて驚いた」と言っています。

戦死の報せを受け取つた日、小泉は奥さんに「子供を育てて一人前にするのも親の務めだが、立派に死んだ子供の一生涯を見届けてやるのも親の勤めだ」と話しています。奥さんは弔問客が帰つた後、信吉の写真をあれこれ取り出し、それを見て初めて泣いたと言われます。その夜、暗闇の中から「シンキチ、シンキチ」と呼ぶ奥さんの声。戦場で愛する子供を失つても大声では泣けなかつたあの時代、

親はみんな同じ思いだったでしょう。そして小泉はその悲しみを押し隠して、愛息への追惜の一文を書き綴っていったのです。「彼の生前、私はろくに親らしいことをしてやれなかつた。この一篇の文が彼に對する私の小さな贈り物である」——こう結ばれています。戦後間もなく三百部の限定私家版として親しい人たちに配られました。昭和四十一年に文芸春秋から「海軍主計大尉小泉信吉」として出版されましたから、お読みになつた方も多いと思いますが、切々とした親の愛情に打たれる、私の大好きな本です。

小泉は昭和二十四年から東宮教育参与として今の天皇の教育に当たり、美智子様とのご成婚に尽力して初の民間皇后を誕生させた功労者ですが、「日本の良識」と言われた小泉の起用には、戦争中学習院長として皇太子の教育に携わつてきた山梨勝之進海軍大将の進言があつたようです。小泉の次女妙さんの書いた「父小泉信三」によると、山梨は「殿下のお傍には不幸にあつたことのある人がお付き合いますと良い」。こういう考えを持つていたというのです。確かに、小泉ほど一身に多くの不幸を背負つた人はいなかつたでしょう。長男信吉だけでなく、戦後はたつた一人の最愛の孫をわずか二歳で亡くして、心に深い悲しみを抱えていた人でした。しかも昭和二十年五月二十五日の空襲で火傷を負い、初対面の人と思わず顔をそむるほど、顔にはひどいケロイドが残つていました。

これは、三菱銀行頭取から日銀総裁になつた宇佐見洵が書いているのですが、戦後間もない頃、宇佐見が何かの用で吉田茂首相を訪ねると、吉田が「いま小泉さんが来るから、君も会つていきたまえ」と言います。宇佐見にとつて小泉は慶応の恩師ですが、一瞬ギョツとしたそうです。小泉が火傷を負つて以来、誰にも会いたがらないことを知つていましたし、宇佐見が教わつた頃の小泉は、「六代目」と異名をとるほど、つまり尾上菊五郎のような美男子でしたから、宇佐見としても変わり果てた恩師の顔を見るには忍びませんでした。ところが吉田は、小泉が部屋に入つて来ると、つと立ち上がつて、部屋の照明を暗くしたというのです。宇佐見は「見事な心遣いであつた」と回想していますが、実にいい話です。

ところで、山梨の「不幸にあつた人が良い」との思ひは、どこから生まれたのでしょうか。山梨は立派な軍人でした。昭和五年のロンドン海軍軍縮会議の時、海軍次官をしていた山梨は、米英の国力のほどをよく知つていましたから、軍艦建造競争をするよりは国際協調を維持することが日本を救う道だ。そう考えて条約締結に心血を注いだのですが、海軍はやがて強硬路線の艦隊派が主流になり、山梨は昭和八年、満五十六歳を目前にして「条約派」として予備役にされました。ロンドン会議で首席全権を務めた若槻礼次郎元首相が、山梨に「あんたなどは、当り前に行けば連合艦隊の司令長官になるだろうし、海軍大臣にもなるべき人だ」と思う。それが予備役になつて、今日のような境遇になろうとは、見ていて、実に堪えられん、と言つた。すると山梨は、いや、私はちつとも遺憾と思つていな

ば「日本海海戦勝利の伝統」の中に生きてきたようなものでした。しかし「百発百中」や、土曜、日曜もない「月月火水木金金」の猛訓練も、所詮は肉眼だけに頼るものなのです。艦橋の見張りの水兵には視力の優秀な者を選抜し、特製のピタミンAを飲ませて、夜間八^キ先でも敵艦を識別出来るほどにしていたんだそうです。戦艦「大和」や「武蔵」には、距離を測るため長さ十五^キもある巨大な測距儀が取り付けられました。電波で見る時代になっていのに、肉眼では時代遅れも甚だしく、「大和」の測距儀はやがて「馬鹿メートル」と自嘲されることになりました。そしてレーダーの前には、もはや黒い目も青い目も問題ではなかったのです。アメリカ艦隊はレーダーで日本艦隊を捉え、その電波が同時に大砲の照準を整えて、真つ暗闇の中からも正確に命中弾を撃ち込んだのです。

この異変にまず気が付いたのは、昭和十七年十月十一日夜のサボ島沖海戦でした。ガダルカナルへの輸送作戦を支援していた第六戦隊が、新式レーダー装備の軽巡洋艦ヘレナに距離一万八^キで捕捉され、先制攻撃を受けたのです。先手をとられた日本艦隊は、重巡洋艦「古鷹」、駆逐艦「吹雪」が撃沈され、旗艦の重巡洋艦「青葉」も大破して司令官の五藤存知少将が戦死しました。

そして「レーダーなくしては、もはや戦えない」ことを思い知らされたのが、十八年七月十二日未明のコロンバンガラ島沖海戦です。第二戦隊が米豪連合艦隊と激突したのですが、先頭を走る旗艦の軽巡洋艦「神通」は、危険を承知で探照灯を照射し、単縦陣で進んで来る敵艦隊の位置を後続の駆逐艦九隻に知らせました。日本海軍が誇る酸素魚雷、この魚雷は時速九十^キの高速で二万二千^キを走り、米軍魚雷の四倍の高性能だったと言われますが、たちまち軽巡洋艦三隻を大破し、駆逐艦一隻を撃沈したのです。しかし、言わば「おとり」になった「神通」は実に二千六百発という命中弾を受け、船体を真つ二つにされて沈没しました。最初の砲弾から至近弾を浴びてきた上、射撃速度も日本の三倍。形の上では優勢勝ちだったとはいえ、この「神通」の最期は、まさに「レーダーなき悲劇」を物語るものでした。

八月六日深夜には、コロンバンガラ島に陸軍部隊を輸送中の駆逐艦四隻が、ベラ湾でレーダー照準による雷撃を受けたのです。交戦のいとまもなく三隻が撃沈され、乗っていた熊本第六師団の将兵九百四十人のうち八百二十人が犠牲になりました。軍令部参謀の高松宮海軍大佐は、日記に「早くヨリ電探ヲ使用シ、魚雷戦準備ヲナセルコト確実ナリ」。こう所見を書いて、レーダー装備が急務であることを指摘していますが、この夜戦の完敗で、これ以後アメリカ側から「東京急行」と呼ばれていた、駆逐艦による中部ソロモン諸島への増援輸送作戦は中止されたのです。

日本国内ではその頃、町内会や在郷軍人会が先頭に立って、敵機早期発見のため、防空監視所作りに躍起になっている時でしたが、東京帝大航空研究所の富塚

ば「日本海海戦勝利の伝統」の中に生きてきたようなものでした。しかし「百発百中」や、土曜、日曜もない「月月火水木金金」の猛訓練も、所詮は肉眼だけに頼るものなのです。艦橋の見張りの水兵には視力の優秀な者を選抜し、特製のピタミンAを飲ませて、夜間八^キ先でも敵艦を識別出来るほどにしていたんだそうです。戦艦「大和」や「武蔵」には、距離を測るため長さ十五^キもある巨大な測距儀が取り付けられました。電波で見える時代になっていのに、肉眼では時代遅れも甚だしく、「大和」の測距儀はやがて「馬鹿メートル」と自嘲されることになりました。そしてレーダーの前には、もはや黒い目も青い目も問題ではなかったのです。アメリカ艦隊はレーダーで日本艦隊を捉え、その電波が同時に大砲の照準を整えて、真つ暗闇の中からも正確に命中弾を撃ち込んできたのです。

この異変にまず気が付いたのは、昭和十七年十月十一日夜のサボ島沖海戦でした。ガダルカナルへの輸送作戦を支援していた第六戦隊が、新式レーダー装備の軽巡洋艦ヘレナに距離一万八百^キで捕捉され、先制攻撃を受けたのです。先手をとられた日本艦隊は、重巡洋艦「古鷹」、駆逐艦「吹雪」が撃沈され、旗艦の重巡洋艦「青葉」も大破して司令官の五藤存知少将が戦死しました。

そして「レーダーなくしては、もはや戦えない」ことを思い知らされたのが、十八年七月十二日未明のコロンバンガラ島沖海戦です。第二戦隊が米豪連合艦隊と激突したのですが、先頭を走る旗艦の軽巡洋艦「神通」は、危険を承知で探照灯を照射し、単縦陣で進んで来る敵艦隊の位置を後続の駆逐艦九隻に知らせました。日本海軍が誇る酸素魚雷、この魚雷は時速九十^キの高速で二万二千^キを走り、米軍魚雷の四倍の高性能だったと言われますが、たちまち軽巡洋艦三隻を大破し、駆逐艦一隻を撃沈したのです。しかし、言わば「おとり」になった「神通」は実に二千六百発という命中弾を受け、船体を真つ二つにされて沈没しました。最初の砲弾から至近弾を浴びてきた上、射撃速度も日本の三倍。形の上では優勢勝ちだったとはいえ、この「神通」の最期は、まさに「レーダーなき悲劇」を物語るものでした。

八月六日深夜には、コロンバンガラ島に陸軍部隊を輸送中の駆逐艦四隻が、ベラ湾でレーダー照準による雷撃を受けたのです。交戦のいとまもなく三隻が撃沈され、乗っていた熊本第六師団の将兵九百四十人のうち八百二十人が犠牲になりました。軍令部参謀の高松宮海軍大佐は、日記に「早くヨリ電探ヲ使用シ、魚雷戦準備ヲナセルコト确实ナリ」。こう所見を書いて、レーダー装備が急務であることを指摘していますが、この夜戦の完敗で、これ以後アメリカ側から「東京急行」と呼ばれていた、駆逐艦による中部ソロモン諸島への増援輸送作戦は中止されたのです。

日本国内ではその頃、町内会や在郷軍人会が先頭に立って、敵機早期発見のため、防空監視所作りに躍起になっている時でしたが、東京帝大航空研究所の富塚

清教授は関西で講演をした後、警察に呼ばれて注意されました。「防空監視所は役に立つか?」。こう聞かれて「そんなものはだめだ。目で見える頃には、もう四、五^キに迫っている。それから用意するのはおそい。電波探知機で何十^キ先のものを見つける必要がある」。こう言ったのが、引つ掛かったのです。「すみませんでした。以後慎みます」と頭を下げて引き下がったんだそうですが、それにしても日本海軍がこうまでレーダー開発に後れをとったのは、なぜだったのでしょうか。

一言で言えば、日本海軍は一点豪華主義。戦艦「大和」とかゼロ戦、酸素魚雷のように、世界の最先端を行く兵器を開発し、実用化させていましたが、総合的な技術力となると、まだまだ底が浅かったのです。例えば、翼をもがれたゼロ戦にエンジンの壊れたゼロ戦の翼を継ぎ足し、一機分を仕立てようとしても、ボルトの穴が合わないんだそうです。結局、二機とも壊れたまま放っておくしかありません。それが撃墜したB29爆撃機の翼で実験してみると、別々の飛行機の部品が寸分の狂いもなくピタツと合います。日本の技術者は「こりやダメだ。とてもかなわん」と思ったそうです。今ボルト、ナットの精密技術では、日本が世界一だと言われていますが、当時の工業力はそんな程度のものだったんです。

谷恵吉郎技術少将、この人は東京帝大の電気工学科を出て海軍に入り、レーダー開発の責任者だった人ですが、「当時の日本のレーダー技術は、爪先立ちの状態。レーダーを作るには総合的な工業技術が必要で、全ての部品で高いエレクトロニクス技術が要求されたが、日本にはそれがなかった」と言っています。昭和十一年の海軍技術研究所主任会議では、「電波兵器の研究に着手すべし」という研究テーマが出ていたんだそうです。当時中佐だった谷は、「敵艦に反射して、返って来る電波を利用し、敵艦までの距離と方向を捉える」。こういう研究を提案しましたが、結局採用されませんでした。理由は「敵前で電波を出すことは、自分の位置を教えるようなもの。奇襲を伝統とする日本海軍にはなじまない」と言うのです。技術の世界でさえ、伝統という名の硬直化した戦術思想に毒されていたわけです。谷は言っています。「革新兵器の達成には、トップがしっかりしていなければダメだ。下部組織の充実だけでは達成出来ない。海軍の技術研究は艦政本部監督下にあり、その艦政本部のモットーは『明日の戦闘に間に合わせる』だ。どうしても目前の兵器改善に追われて、それ以上の革新兵器には到底手がつけられない状況だった」。

それでも技術研究所は、昭和十四年秋の連合艦隊演習で、短い波長を使った基礎的な実験に成功していました。鶴見海岸の四階建てビルの屋上に十^キ波の送信機を置いて、沖に停泊していた空母「赤城」に電波をぶつけ、反射電波を受信したのです。しかし、海軍首脳はその価値を認めず、研究陣は拡大されませんでしたし、「急げ」の号令もかかりませんでした。「大艦巨砲主義」で、こうした研究は後

回しにされたのです。実は、第二次世界大戦が始まってから、イギリス駐在の海軍武官からは、レーダーの威力が再三報告されていきました。ドイツ空軍のイギリス本土爆撃は昭和十五年八月十日から始まりましたが、劣勢のイギリス空軍が連日連夜の猛爆撃に勝利を収めることが出来たのは、ドーバー海峡の海岸線五カ所に設置したレーダー基地、ここでいち早く敵機来襲をキャッチし、効果的な迎撃態勢をとることが出来たからなのです。

日本海軍が遅蒔きながらレーダーの本格的研究に着手したのは、昭和十六年二月、ドイツに軍事視察団を派遣してからでした。谷と共にレーダー研究の第一人者と言われた伊藤庸二技術大佐は、ブルターニュ半島の高射砲陣地に設置されたレーダーを見て、「ドイツの研究が進んでいるとは聞いていたが、ここまで達成しているとは知らなかった」と、その技術の高さに驚嘆したそうです。直径三メートルのパラボラアンテナは探知距離四十キロ、敵味方の識別装置まで備えていました。

伊藤の詳細な報告を受けて、海軍も研究態勢の整備に乗り出したのですが、先頭に立ったのが、昭和十六年五月に軍令部第三課長になった柳本柳作大佐です。第三課は作戦に必要な施設や兵器の整備が担当でしたが、柳本はすでにテレビ技術を完成させていた元浜松高等工業教授の高柳健次郎博士を、海軍技師として招き、日本無線や日本電気の技術陣を督励して、レーダー開発にピッチを上げたのです。九月には電波探知機の国産第一号が完成しましたが、波長が長いため海面低く放つと、水面から反射する電波ともつれあって消されてしまい、軍艦用には使えません。結局一号機は飛行機見張り用として、開戦一カ月前に房総半島勝浦に設置されました。

日本海軍が軍艦に初めてレーダーを装備したのは、昭和十七年六月のミッドウェイ海戦に出撃した戦艦「伊勢」と「日向」です。しかし、まだ開発されたばかり、性能も訓練も劣っていました。しかも、レーダー装備の戦艦が機動部隊のはるか後方にいたのですから、実戦では全く役に立たなかったのです。そして柳本大佐は、この海戦で空母「蒼龍」の艦長として艦と運命を共にしていました。急降下爆撃で命中弾三発を受け、炎上三時間二十分。柳本は「総員退去」を命じると、紅蓮の炎に包まれた艦橋に一人留まり、「君が代」を歌いながら沈んでいったと言われます。胸中、「電探があったら……」の思いで、一杯だったのではないのでしょうか。少なくとも、急降下爆撃の奇襲攻撃を受けることはなかったでしょう。谷少将が提案してから六年間の空費が、主力空母四隻を失う大敗につながってしまったのです。

日本側の強い要請で、伊号第三十潜水艦が半年がかりの大航海で、ドイツの高性能レーダー「ウルツブルグ」をシンガポールまで運んで来たのですが、昭和十七年十月十三日、呉軍港に向けて出港したところで機雷に触れて沈没してしまいました。そして、待望の製造図面が日本無線の三鷹工場に届いたのは、十九年一月

七日です。前年の十二月二十一日、伊号第八潜水艦がドイツから現物と一緒に持ち帰ったのですが、日本側の技術者は「当時の日本の電波兵器に比べて、十年以上進んでいるように思えた。構成や基本設計の考え方も、工業技術のレベルも全く違っていた」と話しています。

こうして艦船用レーダーに改良を重ね、昭和十九年夏には何とか完成させましたが、それを搭載する艦隊は内地に燃料がないため、大部分が油を求めてボルネオに出ています。結局艦隊には装備出来ずに、本土防衛用に使うことになったのです。二十年に入ると、B29の本土空襲が激化しました。これを迎撃するには、少なくとも本土から五百キロ海上でキャッチしなければなりません。二十年四月に五百キロまで届くレーダーを作り、石廊崎など五カ所に配置しましたが、この頃にはB29来襲を捉えても、迎え撃つ肝心の飛行機がなくなっていたのです。

アメリカはどうだったのでしょうか。昭和十六年五月、アメリカから届いたばかりの写真面報を見ていた軍令部参謀の間に、激震が走ったと言います。それは四月に就航したばかりの最新鋭戦艦ノースカロライナの写真で、問題は艦橋上部にエアブラシで消した跡があり、「これはレーダーではないか」となったのです。ワシントン駐在の海軍武官に「ノースカロライナを偵察せよ」との秘密電報が打たれ、「艦橋に籠のような構造物あり」の返電でした。しかも追いかけて三カ月後、八月九日から大西洋上で行なわれた米英首脳会談で、イギリス首相チャーチルが乗っていた戦艦プリンス・オブ・ウェールズの写真には、艦橋トップにはつきりレーダーが映っていたのです。米英に先を越されたことが分かって、レーダー製作に拍車がかかりましたが、手遅れだったわけです。開戦直後のマレー沖海戦でのプリン・オブ・ウェールズを撃沈した時、何とかレーダーを回収出来ないかと、船体引き揚げまで真剣に検討したんだそうです。

アメリカ海軍は昭和五年には、もうレーダー実験に成功していました。十四年に遠距離対空用レーダーを開発し、ハワイのレーダー基地に六台を配置しています。さらにマサチューセッツ工科大学にレーダー開発の研究所を設置し、十六年四月に艦船用のマイクロ波レーダー、翌月には目標を自動追尾出来る対空レーダーも完成させていたのです。当初四十人ほどだった研究所員は、戦争末期には三千人以上になっていたと言われます。

ところが日本の方は、いつも精神論、精神主義なんです。参謀本部が昭和十七年七月、飛行機の増産要求を出した時、陸軍大臣を兼務していた東条首相が何と答えののかというと、「飛行機の生産だけでは戦争は出来ない。少ない飛行機で勝つ工夫、転換が必要だ」。十八年に松下電器産業が工場に掲げたポスターには東条の「こやかな大きな顔写真入りで、「東条首相の算術2+2=80」とあります。「これは戦時日本の算術だ。然し一度には出来ない。毎日いろいろと工夫・研究して難しい仕事に勇敢に取り組んで行き。今日は2+2=5。明日は2+2=7にす

るこれが2+2=80にする生産増強の鍵だ」と言うのです。

昭和十八年四月に連合艦隊長官山本五十六が戦死し、「山本元帥の仇を討て」、「元帥の仇は増産で」が、国民決意の合言葉になりました。そして学徒出陣を決めた九月二十一日の閣議で、「国内必勝態勢強化方策」として、やっと航空機生産最優先の方針を打ち出したのです。しかし、いくら「飛行機を前線に送れ」と声をかけても、労働者がいないことにはどうにもなりません。軍需工場は工員を次々と戦場にとられ、十七年の四百七十万人をピークに減少の一途を辿っていました。「東条首相の算術」でも、労働者は生み出せません。そこで残された労働力供給源として、中学生、女学生、家庭にいる未婚女性を動員することになったのです。

この閣議決定では、駅の改札や車掌さん、理髪業、料理人といった十七の業種に四十歳未満の男子の就業が禁止され、代わりに女性をその仕事につけること。そして「女子勤労挺身隊」という名前の工場動員も始まりました。女学校の新規卒業生は同窓会単位、十四歳以上二十五歳未満の未婚で無職、学校へ行っていない女性は町内会、婦人会単位で組織されました。厚生大臣の小泉親彦は、この年の二月の議会で「家族制度を考慮して、国民徴用令による女子の徴用は考えていない。女性の役割は家庭を守ることだ」。こう発言したばかりでしたが、人手不足の前にはなりふり構ってはいられなくなつたのです。最初は自主的な建前をとっていました。十九年八月には一年間動員が義務化され、強制的なものになりました。もともと女性があらゆる分野で働くようになりましたから、これが戦後の職業婦人進出に拍車をかけることになったのは、間違いないでしょう。

中学校、女学校は、私が中学に入った昭和十八年四月から一年短縮して四年制に、大学予科や高等学校も二年になっていました。勤労働員は十七年一月から中学高学年を対象に始まっていましたが、年間三十日以内。それが十九年初めに四月に延長され、三月七日には中学三年生以上は無期限に行なわれることになったのです。そして学校に上級生がいなくなつたと思つたのも束の間、八月二十三日には「学徒勤労令」が公布され、私たちに二年生も軍需工場に狩り出されました。敗戦までに動員された学徒は男子百九十二万五千人、女子百五十万七千人、この他女子勤労挺身隊が四十七万人だったと言われます。「働きながら学ぶ」という建前はありませんが、実質的には「学生服の労働者」であり、学業の放棄になつていったのです。

私が働いたのは板橋・志村の東京光学でしたが、軍需工場はどこも熟練工が不足し、徴用工であふれてしました。生産性は低く、工場に来たかと思うとすぐ診療所通い。薬を貰ってきては「ここが痛い、あそこが悪い」と、働きもせずにごろごろしているのです。少年工の遅刻、欠勤、サボタージュも増えています。十八年一月の閣議は「少年工員の不良化問題に関する緊急対策要綱」を決めたほどでした。そこへいくと学生は純真であり、必勝の信念にも燃えています。私の家は二

十年五月二十五日の空襲で焼け出されたのですが、その日も休まずに、都電が不通の中、小石川から志村まで歩いて通ったのですから、真面目なものでした。率先して作業に当たり、過労や病気を隠して働く学生は、軍需工場からは大いに歓迎されたわけです。

この間、軍需生産を統一的、計画的に行い、特に飛行機増産に全力を挙げるため、昭和十八年十一月一日、商工省と企画院、それに陸海軍の一部部局を統合して軍需省が発足しました。初代軍需大臣は東条首相が兼務し、軍需会社に資材、労働力を優先的に割り当て、統一により効率性を高めようというのですが、それまでの陸海軍の対立は、それはひどいものだったのです。航空兵器総局長官になった遠藤三郎陸軍中将は、「全てが欠陥だらけ。その中でも一番大きな欠陥は陸海軍の対立だった」と言っています。三菱や中島飛行機では陸海軍両方の飛行機を造っていました。同じ会社でも陸軍の技師と海軍の技師の交流は許さないので。絶対秘密主義で、機材の融通もさせない。工場にニツケルがあっても、それが陸軍の世話したものと、海軍の飛行機には使わせない。海軍の建築資材で建物は出来ても、そこに入れる機械が陸軍のものだと、停車場に放っておかれて赤錆だらけになっていたそうです。

軍需省が出来ても、アルミなど資材配分をめぐる陸海軍間の争いはありました。昭和十九年九月には月産二千五百七十二機と戦争中の最大値を記録しています。それでもアメリカの三分の一以下でしたが、それも間もなく始まった米軍機の本土空襲で、生産量は急激に低下していったのです。南方から資源を運んで来る船は、一ト造るごとに三トも沈められました。原料も不足して、昭和二十年七月の月産は千百三十一機に落ち込んでいます。

こうして、あらゆる形を動員して行なわれた軍需生産でしたが、未熟かつお腹を空かせた学生や女性を中心になって造るのです。いくら真面目でも、とても熟練工の穴を埋められるものではありません。品質のばらつきが大きくなり、兵器の質も次第に低下していきました。私がやったのは設計課でのトレース作業でしたが、新兵器と称する図面を大久保の陸軍兵器本部に届けるたびに、「私なんかがやったもので大丈夫なのだろうか」と、不安に駆られたものでした。中でも複雑な加工技術と代用品利用による飛行機の質的な低下はひどく、それが航空機事故につながったのです。参謀本部の「機密戦争日誌」は、昭和十九年六月一日の日記に「航空機ノ事故損耗ハ一カ月一飛行団分、これは百二十機に当たりますが、一カ年四飛行団分ノ莫大ナル数ナリ」。こう書いて、四百八十機が事故で失われたと嘆いています。

アメリカは開戦と同時に、三交代制による二十四時間操業態勢に入っていました。日本がアメリカに比べて低かったのは、生産量や資源の量だけではなく、こうした生産態勢を整える生産基盤全体だったのです。開戦前の日本の飛行機製造

は、陸海軍別々の発注による小規模製造のようなものでした。これを大量生産態勢の持つていくには、工場の拡大、工員の大量確保だけでなく、工場までのバス輸送による通勤網、さらには食堂を整備する。こういったものまで、細かな面にわたっての総合的な対策が必要だったのです。それを「東条首相の算術」で解決しようというのですから、B29で攻めて来る米軍に対して、家庭の主婦にまで竹槍訓練をさせる発想しか生まれなかったわけです。そしてこの竹槍こそは、戦おうにも武器が竹槍しかなかった。当時の日本の現実を、何よりも雄弁に物語っていたように思います。

軍需工場が集中的に爆撃されたため、動員学徒や女子勤労挺身隊に多くの犠牲者が出ました。動員学徒の死者は一万九百六十六人とされていますが、そのうち八千九百五十三人が広島、長崎の原爆で亡くなりました。広島では建物の強制疎開に動員され、太田川に集まっていた中学生が一瞬のうちに全滅したと言います。

この勤労動員によつて、戦争末期にまともな教育が行なわれていたのは、皮肉なことに陸軍士官学校や幼年学校、海軍兵学校など、軍関係の学校だけだったと言つてもいいでしょう。それでも私や同級生は、東京光学の作業が終わると、その青年学校の教室を借りて補習授業に励んだものでした。中でも一生涯懸命だったのが英語の勉強です。と言いますのは、海軍省が昭和十九年七月、中学三年修了者を対象に、兵学校と経理学校の予科生徒を二十年春から採用すると発表したからでした。海軍の試験には英語があつたのです。私は当時〇・〇六のひどい近視でしたが、せめて経理学校に入りたいと、その受験資格である裸眼視力〇・二にしようと、毎晩星空に目をこらしては、涙ぐましい努力をしたものでした。

陸軍はどうだったのかというと、昭和十五年四月には早々と士官学校、経理学校や幼年学校の入学試験から英語を廃止していました。その際「外国語重視偏重の弊風を打破改正するの先駆たらん」。わざわざこんな発表をしています。陸軍幹部の近視眼的な物の考え方は、歴史は国史だけ、外国地理もアジアだけという徹底ぶりでも分かります。陸軍将校が世界の歴史、地理を知らなくて、いったいどうするのかと思いますが、それが海軍で英語教育が守られたのは、昭和十七年十月に海兵の第四十代校長になった井上成美の存在が大きかったです。

井上については、軍務局長時代に大臣の米内、次官の山本を助けて日独伊三国同盟に一貫して反対し、この戦争にも反対だったことは、これまでも何度かお話ししましたが、その井上が海兵校長になつて、まず気が付いたのは生徒の目がみんな釣り上がり、緊張していることでした。まあ、日本中が目釣り上げている時ではありましたが、家畜の生活みたいで、生徒にさっぱりゆとりがない。下らないルールばかり増えて、生徒がみんなそれに縛られている。そこで井上がまずやったのが、海兵の「教育改革」とも言うべきものだったのです。石造建築の教育参考館の壁には、歴代海軍大将六十六人の写真が額入りでずらりと並べてありまし

たが、それを全部下ろさせました。「兵学校の教育は出世主義ではない」と言うのですが、同時にこの中には日本を今日の事態に追い込んだ、国賊とも言うべき提督が何人もいる。その肖像を、若い生徒たちに仰がせるわけにはいかない。この思いも強かったようです。休暇の時に「何をした」という、日誌の提出も止めさせました。上級生が事前検閲して、「叱られるからそれは消せ、こういうことを書け」と、メーキングすることが多く、「こういうことを続けていると、しまいは陛下の前で平気で嘘を申し上げる海軍士官が出来ることになる。百害あつて一利なし」と止めさせたのです。

これは、井上が昭和十九年八月、再び海軍大臣に返り咲いた米内の下で海次官に就任した時の話ですが、米内から「陛下から燃料の現状についてご下問があつたので、奉答に必要な資料を用意してほしい」と指示されました。軍需局長を呼んで資料作成を依頼すると、「本当のことを書きますか？」と言うのです。「変なことを聞くね。陛下に嘘は申し上げられない。無論本当の数字だ」。こう言うと、その局長は嶋田繁太郎が大臣時代、天皇が心配しないように、命令でいつも「油は十分ある」と作文した資料を出していたんだそうです。情けないことに、これが戦争中の海軍首脳の姿でした。

井上が目指したのは、軍人教育ではなく、社会に通用する人間の教育だったのです。「実社会へ出てすぐ目先の役に立つような教育は幼稚教育であつて、兵学校が幼稚の養成を教育目標にするのは不見識だ」と、よく言っていたそうです。教官たちにも「一日一回でもいいから、生徒が腹の底から笑える機会を作つてやつてほしい」と要望し、校長権限で教室での教官の武勇談、実戦談を禁じました。

そこへ海軍省教育局が、「十八年の生徒採用試験から、英語を外してはどうか」と言ってきたのです。プロ野球でさえストライクを「よし一本」、三振を「それまで」と日本語にして、英語追放が時代の流れになつていく時でした。中学でも英語の時間が少なくなつていて、このままでは成績優秀な少年が海兵を避けて、英語のない陸軍士官学校へ行ってしまうのではないかと心配したのです。どうするか。教官百五十人ほどが集まって会議を開いたのですが、最後に教頭が「英語の入試廃止に賛成の方は起立願います」。こう言つて決をとると、英語科の教官五、六人を除いてみんな立ってしまいました。教頭が「校長、ご覧の通りです。宜しゅうございますか」と言うと、井上は「いかん！」と言つて、「俺は校長権限で入試から英語を廃止することは許さん。英語の授業を止めることは勿論許さん。現在通り」と叫んだということです。井上は続けました。「いったいどの海軍に、自国語一つしか話せないような将校があるか。そのような者が世界へ出て通用するわけがない。海事貿易上、英語が今日なお世界の公用語として使われている以上、海軍将校たらんとする人間にとり、英語は必須の学術であり技能である。試験に英語があるのを嫌がつて、秀才が陸軍へ流れるのなら流れて構わない」。

若手の武官教官からは「校長横暴、時局認識不足」。こんな声も出しましたが、井上の決然とした一声で英語廃止案は立ち消えになりました。昭和十八年の第七十五期以降の採用試験でも、従来通り英語の実施が決まったのです。十二月一日、その七十五期生三千五百人が入校して来ると、井上は英語の教育法も一新してしましました。授業では「英英辞典」しか使わせなかつたのです。従来のような英文和訳中心の教え方では、どうしても目で英語の文章を追いなから、頭の中は日本語で考えることになる。「英文は頭より読み、意味の分かることを目標とすべし」と言うのです。ところが、どっと入って来る新入生だけではなく、在校生のために大量の辞書を買わなければなりません。主計課長から「五千冊もの辞書を一挙に買い入れるだけの予算がない」と反対が出ると、井上は笑顔で呼び掛けたといいます。「要するに、金で済むことじゃないか」。この一言で、あっさり決着がついたんだそうですが、これも「何が大切なのか」、いい言葉ですね。

当時海兵の教育課長をしていた小田切政徳大佐は、「表面に出しては言えないが、井上校長は終戦を考えていたようです。日本が負ければ、兵学校の生徒は民間の学校に転出しなければならぬ。その時困るだろうと、英語ならびに数学、物理、化学といった普通の学問を奨励されたのです」と言っています。井上自身も、戦後の回想でこう語っています。「私は、この青年たちがかわいそうだと思つたんです。戦争に負けてほっぽり出されたら、どうするだろうと思つてね。親の身になってみると、国のためだなんていって、勇んで兵学校に入つて来て、戦争に負けて途中で放り出されたら、鉄砲の撃ち方ばかりなんか覚えていても、さて社会で働こうといつたって、どうなるかと」。

井上は昭和二十年五月、大将に昇進し、大将の次官は前例がありませんから、軍事参議官に転出しました。次官就任と共に精力的に取り組んでいた終戦工作が中途になるのが、心残りだったのでしよう。退任の日、米内に「負け戦、大将だけはやはり出来」。こんな自作の川柳を示して、「後世の物笑いですよ」と言っています。戦後は、相模湾の見える横須賀市長井の崖上の家で、近所の子供たちに頼まれるままに、夜や土曜の午後に英語を教えるだけの生活でしたが、月謝はとりませんでした。生徒は全部で百三十人ほどになりましたが、親たちは何人かで百円ほど包んだり、家で取れた野菜や魚をお礼代わりに届けたといいます。生徒には英語でしか話させず、「英語は歌で覚えるのがいい」と、井上がギターを弾いて英語の歌を合唱したのです。井上は、生徒に三つのことを約束させていました。約束した時間に遅れない、物を大事にする、困っている人を見たら助けること。みんな口々に「英語はもちろん教わりましたが、それ以上に教えて頂いたのは、人間としての生き方でした」と言っていたそうです。海兵で井上の教えを受けたのは、第七十二期から七十五期までの六千人ほどですが、井上が昭和五十年十二月十五日、八十六歳の生涯を閉じたとき、通夜、葬儀、追悼会など全ての

世話には、直接教わらなかつた七十六期から七十八期生も参加しています。先輩たちから聞く井上の人柄に、感銘を受けていたのでしょう。

毎年八月十五日が来ると、長井の海岸には、海軍の軍帽を被り、海に向かつて一日正座している井上の姿が見られました。胸中「早く戦争を終わらせていけば……」の思いで、いっぱいだったのではないのでしょうか。そしてその思いは、終戦を決めた首相鈴木貫太郎も同じだったのです。海軍の大先輩で海兵校長をしたこともある鈴木が、突然江田島を訪ねて来ました。当時は枢密院副議長でしたが、校内を視察した後、井上にこう言つたといふのです。「井上君、兵学校のな、生徒教育の本当の効果は、大体二十年後に表われる。いいか、二十年後だぞ、井上君」。鈴木 of 伝記「鈴木貫太郎伝」には、「戦争といふものはあくまで一時期の現象であつて、長期の現象ではないことを知らねばならない」。そして「敗けるといふことは滅亡するといふことと違ふのであつて、その民族が活動力さえあれば、立派な独立国として世界に貢献することもできるのであるが、玉碎しては国家そのものがなくなり、再分割されてしまふのだから、実も蓋もない」。こういう鈴木 of 言葉が記録されています。

この「二十年後」といふ言葉には、やはり終戦を見据えていた鈴木 of 思いが籠められているように思います。鈴木は日本の本格的復興を見ることなく、昭和二十三年に千葉県 of 関宿で亡くなりましたが、「民族 of 活動力さえあれば」といふ言葉も、国際関係がますます多難な時代、私たちを勇気づけてくれる素晴らしい言葉です。